
2001年春夏ファッション傾向

ジャルフィック 菊原 亜紀江

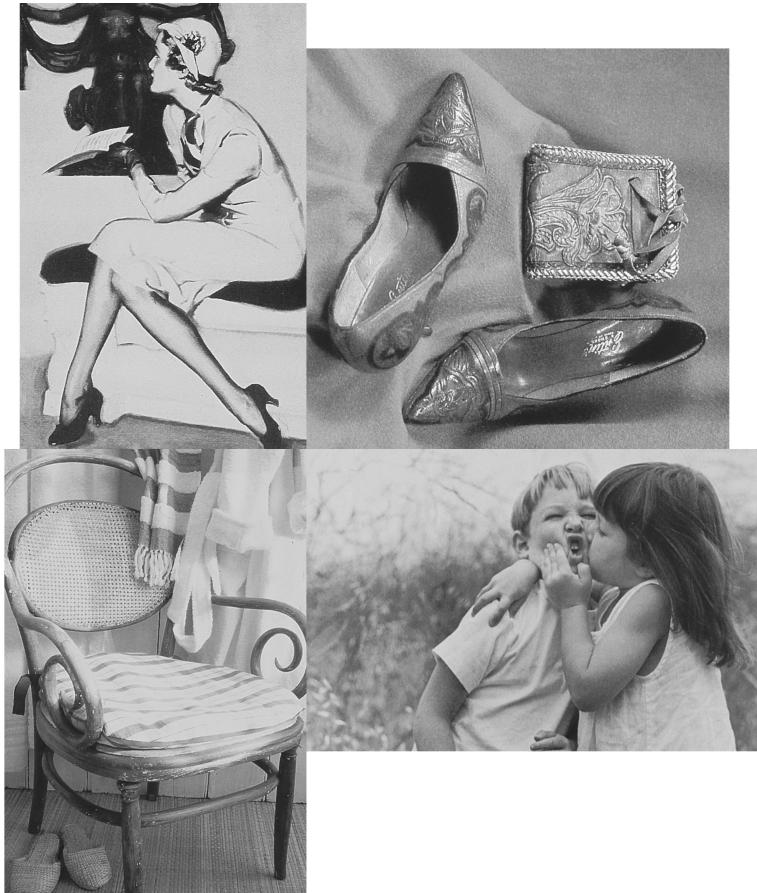
クラシックの流れはさらに浸透し、情緒性溢れる豊かな女性らしさがファッションのインスピレーション源となる

'90年代に浮上した様々なスタイルの特徴を一言で表現すると、そこには「過去のスタイルをアレンジする」という言葉が挙げられるでしょう。

過去に完成された様々な様式を素材やカラーの変化で新しい表現をしてゆく、時には全く異なるイメージとの組み合わせなどによって、今日的な感覚を訴求するといったテクニックは'90年代の中盤、ピークを迎えます。その後も、アレンジという手法は継続しながらも、次なる視点として21世紀に向かた新しいファッションを生み出そうとする気運が高まってゆきます。“ミレニアム”という言葉が、社会的なキーワードにもなり、一般的に用いられるようになる頃には、既にファッションの世界には新時代に相応しい全く新しいスタイリングを生み出そうとするクリエーションが顕著化していました。

今までには不可能とされた素材の開発や機能性、技術の進歩に裏付けられた中で、新しい形やアイテム、着こなしが見るものに新鮮な驚きを与えたのです。未来的なイメージを加味したスポーティな着こなし、ミニマルなファッションの流れを汲む造形的なシルエットのデザインなど、ウェアから小物を含め、アイテムのカテゴリーを超えたデザインが次々と生まれて来たのもこの頃です。

そして今、このような時代を経て、ファッションには改めてクラシックへの回帰が大きな潮流となっています。新しさにこだわり、過去にないものを追求するといったこれまでの流れに対するゆり戻りや、数シーズン続いたユニセックス感覚のカジュアルの拡がりに相対するエレガנס化という見方、そして時代の節目だからこそファッションの原点に立ち戻るという考え方…様々な背景がそこに根ざしています。しかし、2001年春



夏シーズンで表現されるクラシックは、単に過去の様式を再現するという表面的な解釈では捉えたくないかもしれません。その時代に脈々と育まれていた伝統性や、人々の優しさ、情緒深さといった、時代の根底に存在するものまでも捉えたクラシック回帰と考えたいのです。それは、昨シーズンから既に浮上している“エレガンス”にさらにヒューマニックな人間味溢れる感覚を添えてゆきます。

内面から生まれる豊かな女性らしさが、具体的には時代性や素材感、色感、デザインに至るまで影響を及ぼします。“エモーショナルな情感に訴えるクラシックな装い”それは、新しさをアピールするアレンジよりも、むしろ過去のスタイルを素直に表現する見え方として現れます。常に新しさを求め続けてきた、近年のファッションシーンに心地よい安らぎを与えてくれるでしょう。

また、この安らぎは、時に子供の頃の無邪気な世界や、幼い頃の記憶を呼び覚ます、ピュアで素直な感情を伴って、自らの記憶を遡り、着こなしに反映されます。

このように2001年春夏シーズンのファッションに浮上するムードには、過去のスタイルが再びクローズアップされて来ますが、全体として優しく穏やかな雰囲気が漂っています。しかし一方で非常に開放的でダイナミックな印象のイメージも同時に浮上しているのです。

地域性を“アメリカ”に置いたファッションインスピレーション。レトロなアメリカンポップで表現されることもあれば、’80年代の開放的なエレガントスタイルとして提案されることもあり様々な表現が想定されますが、現状の日本のマーケットやクラスターを考慮すると、このような明るさや遊び心を盛り込んだ、クラシックの捉え方が存在しても不思議ではありません。

以上のように2001年春夏シーズンには、様々なクラシックスタイルが蘇りますが、それらを表現する要素としてカラー及びウェア素材の傾向とスタイリングディレクションとして3つのテーマをご提案します。

カラー傾向

2000-2001年の秋冬のカラー傾向として、黒を中心としたニュートラルカラーの減少、色味の方向ではブラウン、パープル、ボルドーといったカラーの拡がりが見られるなど、秋冬らしい温もりをもったカラーが浮上しました。

2001年春夏シーズンでも色味のある傾向は続きますが、ファッションのクラシック化やシックでエレガントなスタイルの拡大により、全体的にマイルドなトーンへ変化します。また、これまで主張が強かったり、艶感が伴っていたものに、マットな表現が加味されます。時間を経たり、使い込んで色あせた色調や陽の光に晒されて色落ちしてしまったような見え方が、素材感を含め新鮮に映ります。

前シーズン、ブラウン系の流れで登場したベージュは、引き続き注目されますが、ピンク、オレンジ味まで色調を拡大し、光沢の表現として、様々なゴールド系の色味までバリエーションが見られるでしょう。2000年春夏シーズンにブレイクしたピンク、ターコイズブルー、グリーン、イエローといった強めのライトカラー、ブラウン～パープルにかけてのダークカラーは、2001年春夏では、よりマイルドな方向で用いられます。

色相的には、全体として暖色系の流れが継続し、注目カラーとしてマイルドなオレンジ、ピンク、様々なベージュ～ブラウンが挙げられます。一方で、パープルに変わり、ブルーを中心とした寒色系カラーの出現にも注目しておきたいところです。

また、配色については引き続き非常に重要ですが、コントラストを伴った表現よりも、むしろトーン オン トーンの自然になじむカラーの調和が大切になってゆくでしょう。

ウェア素材の傾向

カラー同様、素材の傾向にもクラシックの影響が見られます。但し、前シーズンのクラシックの表現との違いには、第一に優しく穏やかなムードが希求されていることでしょう。

見る者を印象付ける、存在感をもった表現は、カラーの提案も含んだ形でソフトな見え方にシフトします。そのため、よりクラシックでレトロな印象が高まるのです。

また、クラシック感をさらに演出するテクニックとして欠かせないのが、時間が経過した見え方や、使い込んで馴染んだ表情などです。柄表現もソフトなカラーリングが重要になる中、織りやプリントで見せる装飾性に注目です。

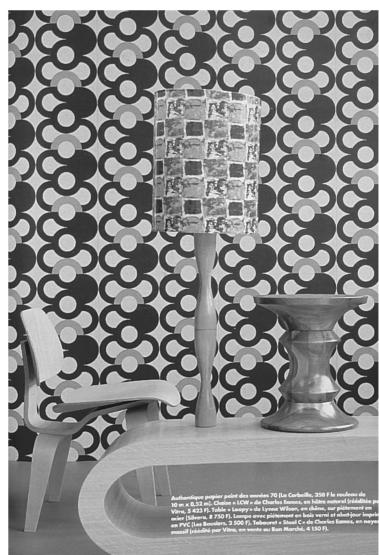
また、インスピレーションのヒントに、インテリアアイテムからの素材感が用いられていることも、2001年春夏素材の特徴でしょう。

いずれにしても、人の手の温もりを感じさせる温かみのある素材感が益々求められるシーズンですが、中でもクラフト感覚の表現は、皮革素材なども含め重視されるでしょう。

【注目される素材のグループ】

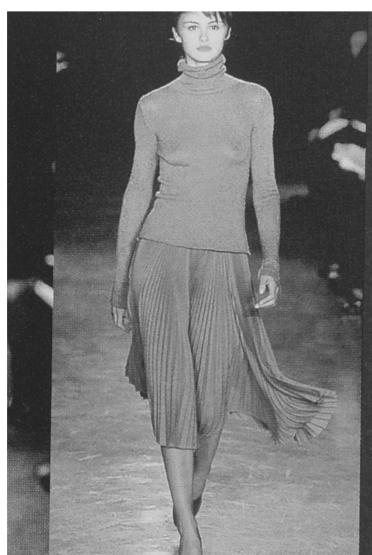
インテリアファニチャー

ソファーやカーテン地などに見られる素材感やパターンのグループ。主に、'50年代のレトロなインテリアにインスピレーション。テーブルクロスやキッチンクロスなど、素材でノスタルジックな柄なども含まれる。



ドレープ感のあるしなやかな薄地素材

ファッショナブルアイテムのシルエットの変化を踏まえクローズアップ。クレープやボイル、シフォン、ガーゼ、ジョーゼットなどの薄手の素材。今シーズンのサテンなどに代わるものとして注目したい。フィラメント糸やラメの光沢感も重要。



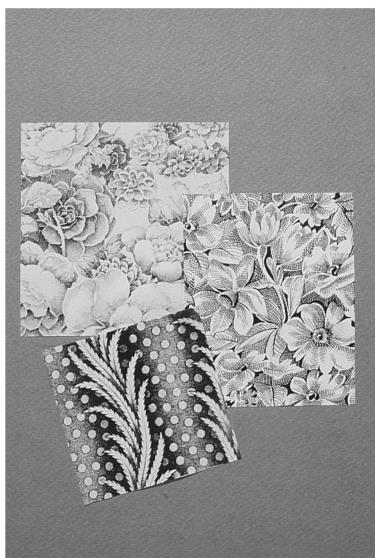
ドライでラスティックなサーフェイス

陽射しを浴びて褪色したようなものや、洗いをかけて着こんだような見せ方をした素材のグループ。起毛や杢での表現も多い。



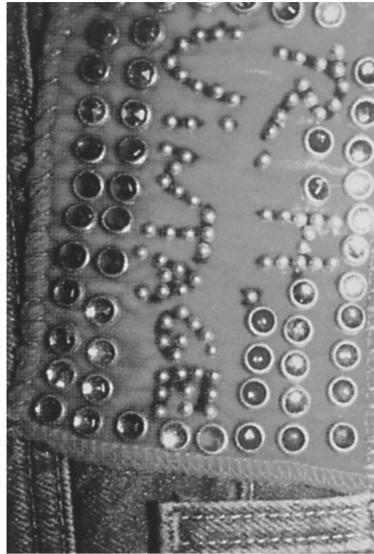
繊細でクラシックな柄

線画や単色画などで描かれた花や幾何柄。特定の画家の作品や、風景画などストーリー性のあるものにも注目。また、ぼかしやにじみなど水彩画タッチの表現重要。



ユーモアあふれるキッチュなグラフィック

遊び心のあるグラフィックのパターン。キッチュさや時にはアイロニーを持った自由な柄表現。パッケージやコミックス調などモチーフと文字の組み合わせで演出。



【スタイリングディレクション①】

'40年代の香りを漂わせるシックでフェミニンなクラシックスタイル

このテーマのポイントは、クラシックの浸透とそれに伴うエレガンスの表現の変化と言えます。2000年、ニュートラに代表されるトラディショナルムードの着こなしが浮上しましたが、そのイメージは、ハリ・コシのある素材で仕立てられた、直線的なシルエットのデザインを中心でした。カラー使いや配色を含めると非常にインパクトのあるスタイルが印象的となりましたが、まるで保守的なコンサバティブなムードに反発するがごとく強さのあるエレガントが特徴となっていました。

この流れは、2001S/Sに向け、クラシックはさらに浸透するものの、エモーショナルなイメージを希求する流れを背景に、むしろやわらかで、より情緒性豊かな印象が大切となります。まろやかで香るような女性らしさが發揮され、インスピレーションとして‘40～50年代の、女性が最も女性らしい装いをしていた時代にヒントを求めるようになります。

素材感もソフトでとろみのあるジョーゼットやシフォンで仕立てられた、ワンピースやフレアースカートといった着こなしが多く用いられ、上品な印象が強まることから、フレンチスリーブやパフスリーブなどの袖のあるデザインも復活、全体としてきちんとした印象ですが、春夏らしい清涼感を与えるスタイリングとして、麻やド



イタッチのコットン、サマーウール素材を用いた、コロニアルやラテンムードのナチュラルで心地よい着こなしも含んでいます。

カラーは白や生成り、ベージュを基調にやや褪せた感じのディープカラーで、乾いた印象の官能的な女性らしさを演出してゆきます。装飾性も引き続き重要ですが、決して華美なものではなく、例えば同色での表現であったり、時を経た色調とクラシックな柄表現などでアンティーク調のシックな見え方を意識している。このようにカラーや素材感の方向から見ても、時代的に遡った印象が高まってゆくでしょう。

【スタイリングディレクション②】

デリケートな温もりと素材さで表現するカジュアルスタイル

幼い頃の記憶を呼び覚ますようななつかしく温もりのある世界…それがこのテーマのインスピレーションの源となっています。

着こなしでは、子供の頃着ていた素朴なデザインのワンピースや、お手製の手編みのニットなど、飾り気のないシンプルなデザインのアイテムがイメージされますが、そこに込められた優しさと愛情を一番のエッセンスと捉えています。

また、ここで大切なのは、身に付けることでやすらぎを感じさせるようなやわらかな素材感。

洗いをかけることで肌に馴染んだコットンやガーゼのようにデリケートな透明感のあるものなど、手触りを含めた温もりの表現がポイントになるでしょう。愛着を持って何年も着込んだというような表情の素材感が特徴です。



子供部屋の壁紙に描かれていたような、可憐な小花柄やストライプのフラワーオーナメントパターンなどもなつかしさを伴ったクラシックムードを演出します。色使いは、麻やコットンの白や生成りなど、無垢で温もりのあるニュートラルカラー、これに草木や花のナチュラルな色味がアソートされます。

また、以上のような要素に加え、ディレクションのイメージを高めるのに大切なのがハンドメイドの手作り感。手縫いのステッチやワンポイントの刺繡など素朴な手法が新鮮な装飾感として用いられてゆきます。

【スタイリングディレクション③】

アメリカンムードで着こなす自由で気ままなミックスカジュアル

スタイリングの①と②がヨーロピアン的な規範に基づいたシックさを根底にするならば、このテーマはむしろアメリカンムードの、底抜けの明るさがインスピレーション源となっています。

そのため、着こなしの核となるのは気軽に着られる、Tシャツやジーニングといったカジュアル単品が基本。カラッと乾いた印象のセクシーさをエッセンスとして、グラマラスなパンキッシュイメージや、クラシックをアメリカンティストで解釈する‘50年代のレトロポップ’の着こなしなどが新鮮さの表現として取り込まれます。

素材の見せ方としては、着古したような表情を高めたデッドストックやヴィンテージ感覚などの処理が施され、また、アイテムでは、リメイク感覚でアンティークムードや手作り風のクラフト感が表現、装飾のテクニックとして、リベットやラインストーンをふんだんに施したものや、ロゴ使いやキャラクターなどのグラフィックプリントを捉えています。

カラーは、様々な色相が見られますが、ドライでやや退色したようなアシッドなトーンがシーズンカラーとして台頭。これらにゴールドやラメ使いなどの素材感を含めた光沢が加味され、テイストにこだわらない自由なミックスカジュアルが展開されます。



参考資料

- | | | |
|---------------|----------------------|----------------|
| ○ ELLE (仏) | ○ FIGARO Japon | ○ VOGUE NIPPON |
| ○ VOGUE (伊) | ○ ELLE Japon | ○ GINZA |
| ○ GLAMOUR (伊) | ○ marie claire JAPON | ○ ハイファッション |
| ○ DONNA (伊) | ○ SPUR | |